腹腔鏡下手術

膵頭十二指腸切除術に成功
2例目、確かな実績に

能代厚生医療センター

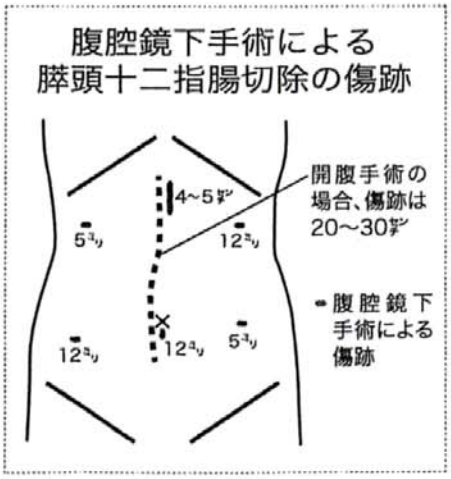
能代市落合の能代厚生医療センター（近田龍一郎院長）は、お腹に小さな穴を開けて治療する「腹腔鏡下手術」で、膵臓や十二指腸などを一括して取り除く高難度手術「膵頭十二指腸切除術」に成功した。県内2事例目で、初の事例も同センターが28年8月に実施。地元に居ながらにして先進医療が受けられる環境が整備されており、患者からも「近くの病院だと退院後も利用しやすい」などと好評だ。

腹腔鏡下手術は開腹手術に比べて傷が著しく小さいため、術後の痛みが少なく、回復が早いというメリットがある。

手術は先月29日に行われた。へそ上に4～5㌢、へそ下と腹部の計5カ所に5～12㍉の穴を開けてカメラや手術器具を挿入、モニターを見ながらの操作で、悪性腫瘍があった十二指腸と連結する膵頭部（膵臓右半分）、胆管の一部を摘出した。手術時間は約5時間30分、出血量は約100cc超だった。

膵頭十二指腸切除術は「膵頭十二指腸乳頭部がん」に対する術式で、通常は開腹手術で行われる。一般的に手術時間は6時間以上かかり、傷の大きさは20～30㌢。輸血を要するほどの出血を伴う場合もあるという。

今回のように患部が入り組んだ箇所にあるなど難しい手術の場合、腹腔鏡下手術では相当な訓練が必要で技術の差が出やすいとされる。同センターでは県内トップの年間300例の腹腔鏡下手術を実施。日本内視鏡外科学会が定める「技術認定医」を2人擁し、学会誌に原著論文が掲載されるなど、学術的活動も活発で全国的に高い評価を得ている。県内の技術認定医は同センターを含めて10人いるが、認定医が複数いる医療施設は少ないのが現状だ。



地方病院で先進医療

患者負担軽減に「技術認定医」2人擁す

手術を受けた能代市の60代女性は「今まで大きい手術は秋田市の大学病院などで受けるというイメージがあった。ここだと入院中も家族にすぐ来てもらえるし、退院後の外来も来やすい。傷も目立たず、近くの病院で手術できてありがたい」と話した。

同センター外科科長の大山健一医師は「腹腔鏡を用いた膵頭十二指腸切除は全国的にも珍しい。経験と技術があるからこそできる手術であり、都市部や大学病院に行かなくても、地元でも先端医療を受けることができる。こうした実情や術後のことも踏まえて、治療する病院を選んでほしい」と話している。